

技術研究本部特集号 の発刊に際して

副 社 長 濤 崎 忍



当社研究所は、昭和44年5月神戸から千葉に集約移設されてから、丁度20年を迎えました。現在の技術研究本部のルーツは、昭和32年8月に開設された葺合工場の技術研究所ですが、節目の行事はこの昭和44年を基準に行っております。順調に20年目を迎えられるのもひとえに需要家並びに官公庁、大学、学協会など関係各位のご指導、ご支援のたまものと深く感謝申し上げます。

顧みますとこの20年間の社会環境、経済環境の変化は激しく、鉄鋼業もその影響を直接、間接に受けてきました。最近の10年間に限って見ても鉄鋼本業の成熟化と新たな成長を求めての新規分野への進出という大きな流れがあり、従来の経験の延長による模索では万全を期し難い面があります。

また、日本の経済力が大きくなり、国際的地位が向上し、グローバルに調和のとれた企業活動を行う必要がより強く要請されてきております。さらに、中長期的には、今後の企業活動に大きなインパクトを与えると予想される様々な要因、たとえばエネルギー、環境保全、人口構成の変化等の諸課題に対する配慮も欠かせません。このような状況は、企業経営に影響するのみならず、研究開発部門への要望にも大きな質的变化をもたらすと考えられます。

一方、鉄鋼現業部門におけるコストダウン、品質向上、新製品の開発など、足元の問題についても、プロセスの革新や高機能化のニーズが山積しております。私は鉄のコストパフォーマンスはいろいろな新素材にくらべて遜色がなく、むしろ優れていると考えておりますが、この優位性をさらに確実なものとするべく努力を続けなければなりません。

したがって、これからの技術研究本部は、従来に増して一層多面的で機敏な対応力と将来に対する深い洞察力、鋭い先見性が強く要求されるものと思われます。研究所は、経営環境の変化を、最も早い時期に、先鋭的に予測し、対応すべき部門の一つであるということを念頭におき、適切な自己変革を勇断をもって実行して頂き度いと希望しております。個々の研究員は、自分の専門分野を深めそして普遍化する努力は勿論ですが、視野を拡げ、自らの知識を他分野へも積極的に活用して欲しいと思います。また研究において重要なことは、物や技術の開発によって新しい価値を創り出すことにありますが、その科学的基礎を固めて知識を確実なものとすることも忘れないようにして頂きたいと思います。

技術研究本部の20周年特集号の発刊に当たり、研究開発に対する所信の一端を述べさせて頂きましたが、関係各位におかれましても当社技術研究本部に対し一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。